

## 巻頭言

## 断層映像研究会の更なる発展を望む

金子 昌生

断層映像研究会の歴史を振り返ってみると、<sup>ほけ</sup>暈断層から始まり、輝かしいCTの幕開け時代からMRIへそして3Dまで、方法論の進歩に従い黄金時代を形成してきた。これから21世紀に入ると、医学は大きな変容を来すことが予想されている。レントゲン時代、CTや核医学の電離放射線から、超音波、MRIの非電離放射線時代に続き、「光」そのものも乳癌の診断や光CTなどに手段として使用され始めている。

映像診断学の進歩は、方法論のみならず、その中味から医学そのものに人体構造や機能を含めた有力な情報源となりつつある。特に情報化時代の最もヘビーな豊富な映像情報を医学界全体特に診療の現場に送り出しつつある。これは将来日本の医療全体の変容にも中心的な役割を果たすとも考えられる。即ち、病院内外の医療における映像情報やその詳細レポートなど、PACSとして、走り廻り、Tele-radiologyも現実的になることがその一歩であろう。診療の現場では、患者からの直接的な身体的情報に加え、臨床検査結果、本当に必須的な映像情報及び機能情報等のエッセンスが無駄なく速やかに伝達され、その患者の診断・治療に役立たせるシステムが確立することが期待される。この為、断層映像研究会が果たすべき役割は、すべての疾患の病態生理を映像情報及び機能情報等により解析可能とし、より早期診断に貢献する研究成果を挙げることである。その研究成果が断層映像研究会雑誌に満載されることを切望する。

(浜松医科大学放射線医学講座 教授)